

B タイプ不整合を用いる表出主義意味論再考

野上志学 (Shigaku Nogami)

三重大学人文学部

道徳語ないし規範語の意味を、道徳（規範）判断ないし道徳文（規範文）の発話における非認知的態度の表出によって説明する表出主義（expressivism）のプログラムにとって、表出主義のメリットがどうあれ、道徳文（規範文）に関する論理をいかにして説明するのか、道徳文（規範文）に合成的意味論をいかにして与えるのかという Frege=Geach 問題（Geach 1960, 1965）の解決は、それが解決されない限り、そもそも表出主義は最初から疑わしいという意味で、避けて通ることのできない課題である。

実際のところ、Frege=Geach 問題は具体的に合成的意味論を与えることによるのみ解決されるのであるが、いまだ論争の余地のない解決は与えられていないと言ってよい。近年では、Frege=Geach 問題に対するハイブリッド的な解決方針（e.g., Ridge 2014）や、そもそも表出主義を意味論のレベルではなく、メタ意味論（metasemantics）のレベルで解釈する方針（e.g., Charlow 2014）も提案されている。本発表では詳しく踏み込まないが、発表者のみるところこれらの方針にもいくつかの問題があり、理想的には純粋に表出主義的な意味論を与える方針の方が望ましい。

さて、Frege=Geach 問題の解決に関して、Schroeder 2008 は、A タイプの不整合を用いるタイプと B タイプの不整合を用いるタイプを区別している。A タイプの不整合とは、矛盾する内容（たとえば、 p と $\sim p$ ）に対して同じタイプの態度（たとえば、信念）が存在することによる不整合であり、B タイプの不整合とは、A タイプの不整合ではないものを言う。この区別に基づき、B タイプの不整合による Frege=Geach 問題の解決を Schroeder 2008 は批判しているが、近年ではさまざまな心的状態の B タイプの不整合の例も指摘されており（Baker and Woods 2015）、B タイプの不整合を用いる方針は直ちに退けられるものではない。またこれをうけて近年では、証明論的意味論における双側面説（Smiley 1996, Rumfitt 2000）のアイデアを用いた証明論的意味論のアプローチも提案されている（Incurvati and Schlöder 2021）。

発表者自身は証明論的意味論を用いるアプローチも有望であると考えているが、証明論的意味論一般がそれ自体で非常に論争含みであることもあり、あえて本発表では、証明論的意味論を用いるアプローチではなく、Blackburn や Gibbard によって提案されてきたより伝統的なアプローチ（e.g., Blackburn 1985, 1988, Gibbard 1992, 2001）の枠内で B タイプの方針がどれほど実行可能か、ということを検討したい。ここで問題は、既存の Blackburn や Gibbard のアプローチの問題は、あくまで意味論のスケッチに留まっていることもあり、具体的に展開する際にどのような技術的な問題が生じるのかも見えづらくなっている、ということである。よって本発表では、Blackburn と Gibbard の意味論を展開する際に生じる B タイプの解決のさまざまな問題を回避しつつ、彼らの著作に散在するアイデアを組み合わせることによって表出主義意味論の詳細をできる

限り埋め、その上で B タイプの方針にはどれほどの理論的コストがあるのかを見極めたい。

文献表

- Baker, D. and J. Woods 2015. How Expressivists Can and Should Explain Inconsistency. *Ethics* 125(2): 391–424.
- Blackburn, S. 1985. *Spreading the Word*. Oxford: Oxford University Press.
- Blackburn, S. 1988. Attitudes and Contents. *Ethics* 98(3): 501–517.
- Charlow, N. 2014. The Problem with the Frege-Geach Problem. *Philosophical Studies* 167(3): 635–665.
- Oxford Studies in Metaethics 1: 217–233.
- Geach, P. T. 1960. Ascriptivism. *The Philosophical Review* 69(2): 221–225.
- Geach, P. T. 1963
- Gibbard, A. 1992. *Wise Choices, Apt Feelings*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gibbard, A. 2003. *Thinking How to Live*. Cambridge: Harvard University Press.
- Incurvati, L. and J. J. Schlöder 2021. Inferential Expressivism and the Negation Problem. *Oxford Studies in Metaethics* 16: 80–107.
- Ridge, M. 2014. *Impassioned Belief*. Oxford: Oxford University Press.
- Rumfitt, I. 2000. ‘Yes’ and ‘No’. *Mind* 109(436): 781–823.
- Schroeder, M. 2008. *Being For: Evaluating the Semantic Program of Expressivism*. Oxford: Oxford University Press.
- Schroeder, M. 2009. Hybrid Expressivism: Virtues and Vices. *Ethics* 119(2): 257–309.
- Schroeder, M. 2013. Tempered Expressivism. *Oxford Studies in Metaethics* 8: 283–314.
- Smiley, T. 1996. Rejection’, *Analysis* 56(1): 1–9.
- van Roojen, M. 1996. Expressivism and Irrationality. *The Philosophical Review* 105(3): 311–335.